

アスペクト的結果構文の類型についての試論

著者名(日)	岩本 遠億
雑誌名	言語科学研究 : 神田外語大学大学院紀要
巻	19
ページ	1-15
発行年	2013-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00000981/

アスペクト的結果構文の類型についての試論

岩本 遠億

要旨

This paper discusses some conceptual conditions on voice alternation phenomena called “resultative” which are induced by aspect. Reduction of argument is accounted for by modifying Pustejovsky’s (1995) extended event structure and Iwamoto’s (2008) condition on aspectual function application that specifies that aspectual functions applying to an event structure be distributed to its subevents. It is suggested that the typological variability of resultatives is attributed to the lexicalization patterns in extended event structures.

キーワード：アスペクト、持続、維持、項構造、ヴォイス、事象構造

1. 序

他動詞から自動詞への文法的変更は、受動化などのヴォイス変換によって行われるというのが一般的な理解である。また、アスペクトは、文法関係の決定には関わらないもので、事象の時間的局面に焦点を当てたり、事象をどのような時間的観点から捉えるかという事柄に関係したものと理解されている。ところが、Nedjalkov and Jaxontov (1988) が結果構文 (resultative) と呼ぶ一群の言語現象では、項構造の変更がアスペクト形式素によって引き起こされており、文法関係の決定とアスペクト解釈とが交差する現象として興味深い。本稿は、このアスペクトと項構造の変更がどのようなメカニズムによって行われるのか、事象構造の観点から考察するものである。

2. 事実

Nedjalkov and Jaxontov (1988) は、アスペクト形式素が項構造変更に決定的な役割を果たしている事実を幾つもの言語から提示している。次の例はロシ

ア語の一方言からの例である。

- (1) a. Omi pomyli pol
they washed floor
'They have washed the floor'
b. Pol pomy-vši
floor wash-PstGer
'The floor is washed' (Nedjalkov and Jaxontov 1988:9-10)

(1a) は、動作主と対象という2つの項を持つ動作事象を表すが、ジェラントアスペクト形を持つ(1b) では、動作主は取り除かれ、対象だけが現れている。項の数が2から1へと減少しているのである。同様の現象は中国語でも見られる (Nedjalkov and Jaxontov 1988, Jaxontov 1988)¹。

- (2) a. Ta kai men
he open door
'He opens the door'
b. Men kai-zhe
door open-Res
'The door is open' (Jaxontov 1988:113)

(2a) では、動詞 *kai* は動作主と対象をとる2項述語である。一方アスペクト形式 *zhe* を共なう (2a) は、動作主が取り除かれ、対象だけが現れる自動詞構文となっている。これらの言語どちらにおいても、動作主は非主題化 (dethematize) されているが、そこにおいて決定的な役割を果たしているのがアスペクトなのである。さらに、Perel' Muter (1988) は、ホメロスの作品に現れる動作完了構文の4分の1が動作主が非主題化された結果構文であると報告している。

- (3) a. egeiro 'to awaken'
b. egergorthasi 'they are awake' 3pl.active.perf

- (4) a. katereipo 'to destroy'
b. katereripe 'it has been destroyed=it lies in ruin'

(Perel'Muter 1988:280)

Nedjalkov and Jaxontov (1988) は、これらのアスペクトと項構造の変更について以下のようにまとめている。

"The resultative per se is voice-neutral. But the resultative from transitive verbs typically expresses a state of the patient of the latter which is usually surfaces as subject in a resultative construction, and therefore the agent has to be deleted" (ibid: 17). 「結果構文そのものはヴォイスに関して中立的なものである。しかし、他動詞をもとにした結果構文は、典型的にその他動詞の対象の状態を表すもので、その対象は通常結果構文の主語として現れ、またそれ故に動作主は削除されなければならないのである。」(訳著者)

しかし、アスペクトによる項構造の変更は、このような他動詞から自動詞といった「受動化」的変更だけではない。Nedjalkov and Jaxontov (1988) は、着衣動詞が同様のアスペクト形式素を伴う場合、状態的な非動作主解釈となると述べている。

- (5) A Russian dialect
a. On nadal šapku
he put.on hat
'He has put on a hat'
b. On (byl) nade-vši šapku
he (was) put.on-PstGer hat
'He has a hat on' (Nedjalkov and Jaxontov 1988:10)
- (6) Chinese
a. Ta dai-shang-le maoz
he put.up-Perf hat
'He put on a hat'

- b. Ta dai-zhe maoz
he put-Res hat
'He has a hat on' (Jaxontov 1988: 113) (cf. Kimura 1981)

(5b) と (6b) は、典型的な状態的結果構文解釈を持つ。すなわち、これらの文は、主語が自分で服を着たり、自分で帽子をかぶったという解釈は必ずしも与えられず、その意味で動作主性が取り除かれている。主語は誰かが引き起こした事態によってもたらされた状況の中にあるということだけを意味する解釈となるのである。さらに、Nedjalkov and Jaxontov (1988) は次のような日本語の例文も、これらの結果構文の延長上にあるものとしている²。

(7) Japanese

- a. Kare-wa heya-ni e-o kake-ta
he-Top room-Loc picture-Acc hang-Past
'He has hung a picture in the room'
- b. Kare-wa heya-ni e-o kake-te i-ru
he-Top room-Loc picture-Acc hang-Ger. Be-Pres
'He is hanging a picture in the room/He has a picture hanging in the room'
- (Nedjalkov and Jaxontov 1988:24, with minor modification)

日本語の「掛ける」は3項述語で、動作主、主題、位置を取る。(7b)では、アスペクトマーカであるテイルが現れているが、この文は次の2つの意味を持つ曖昧文となる。[1] 動作主性が顕在する動作継続解釈と [2] 動作主性が削除された維持解釈である(藤井1960, 森山1988)。すなわち、[1]では、「彼が今目の前で部屋に絵を掛けている最中である」という意味となるが、[2]では、部屋に絵を掛けたのは彼ではないかもしれないが、彼はそれを良しとして、それを受け入れているという意味となる。[2]の解釈が示唆することは、この場合、テイルが動作主の削除に関わっているということである(岩本2008)。

Nedjalkov and Jaxontov (1988) が結果構文として取り上げている現象は、他動詞から自動詞という統語的な項構造の変更を伴うものから、表面的には項の数の変更は見られないものまでを含むが、動作主性の削除が行われるという点については共通しているのである。では、それらの違いは何に由来するのか。以下、このような現象が事象構造によって表示される語彙化の類型と事象投射理論における「相変換関数分配の法則」(岩本2008)によって説明されることを明らかにする。

3. 分析

本節では、上で見た事実関係を説明するための必要な理論的条件について議論する。それは、次の2つによって構成される。[1] Pustejovsky (1995, 2000) の事象構造の中に森山 (1988) の時定項分析の直感を取り入れて事象構造を拡張させ、記述力を高めること。[2] 「相変換関数分配の法則」(岩本2008) の修正。

3.1 事象構造の拡張

前節で見た結果構文の元となる動詞は、他のタイプの他動詞には見られない事象構造の型を持っている。この小節では、結果解釈を可能とする事象構造の型を、Pustejovsky (1995, 200) の拡大事象構造に森山 (1988) の時定項分析を取り入れることによって定義する。

Pustejovsky (1995, 2000) は、事象構造は次の2つの単位的事象構造の組み合わせによって定義されると考えている。

- (8) 「先行関係」(exhaustive ordered part of)



- (9) 「重複関係」(exhaustive overlap part of)



前者は、動作事象と結果事象の組み合わせによって使役変化事象が定義されるというもので、両者の間には時間的先行関係が存在する。「<」は e_2 の終了時が e_3 の出現時であることを表す。一方、後者は2つの下位事象が同時に進行することをあらわすもので、両者の関係は「○」によって表示されている。Pustejovsky (1995) は、これらおよびその組み合わせと主事象の指定によって12の事象タイプを定義し、さらに下位事象をクオリア構造に結びつけることによって、語彙構造に計算可能な体系性を持たせることに成功した。（詳しくは、Pustejovsky (1995)、および岩本 (2008) による解説を参照のこと。）

しかし、このような使役変化における先行関係と2つの下位事象の時間的重複関係だけでは、次に示すような期間句の共起制限を説明することはできない。

- (10) a. *太郎は3日間怪我をした
- b. 太郎は3日間気を失った

森山 (1988) は変化動詞に見られる違いを、持続成分の有無という観点から捉え、前者には持続成分は含まれないが、後者には含まれるとした。さらに、以下のテイル文に含まれる「着ている」の二義的解釈を説明するためにも、「着る」などの着衣動詞には「維持」成分が内包しなければならないとしている。

- (11) 太郎が洋服を着ている [動作継続] / [維持]

森山は、無意志動詞が内包する持続成分を「持続」、意志動詞が内包するそれを「維持」と使い分けているようだが、以下の文においては、「赤ちゃん」は自分の意志で変化の結果状態を維持しているわけではない。

- (12) 赤ちゃんが可愛い服を着ている

従って、「維持」とは意志によってコントロールされた持続状態（すなわち [意志] + [持続]）と定義すべきものである（岩本2008）。着衣動詞は、自分の意志で持続状態をコントロールしていない場合も多いので、意志性のない [持

続] だけが内包されると考えるべきであろう。

「置く、飾る、掛ける」などの設置動詞のテイル形も二義的解釈を持つ。

(13) 太郎がドアを閉めている [動作継続] / [維持]

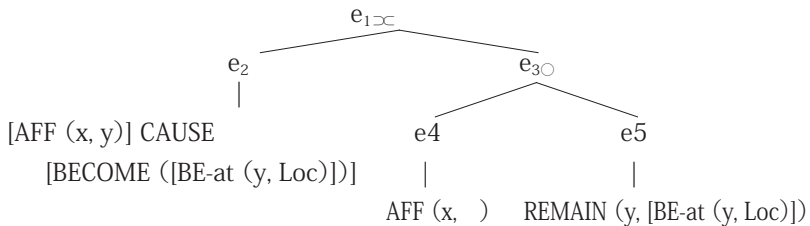
この維持解釈は、着衣動詞と同様、使役変化をもたらした者が文の主語とは限らないが、意志的持続解釈のない着衣動詞とは違い、対象の持続状態は必ず主語のコントロール下にある。次の例を参照されたい。

(14) a. 太郎は、部屋に大きな絵を飾っている
 b. 山田先生は、いつも研究室のドアを開けている

(14a)において、部屋に絵を飾ったのは太郎以外の他者かもしれないが、太郎は自分の意志でその状態を持続させている。(14b)においても、研究室のドアを開けたのは、必ずしも山田先生とは限らず、学生でも清掃員でも良い。しかし、山田先生は自分の意志でいつも研究室のドアを開けた状態を保持しているのである。このように、着衣動詞は意志によるコントロールのない持続成分を、設置動詞は意志によるコントロールのある持続成分を含むのである。

では、このような持続成分は、どのように体系的な事象構造の中に組み入れられるべきであろうか。岩本(2008)は、Ogihara(1998)が形式意味論の枠組みで日本語のテイル形の[結果継続]と[経験・記録]の分析に用いた[隣接関係]を[持続]の分析に援用し、設置動詞について概略次のような事象構造を仮定している。

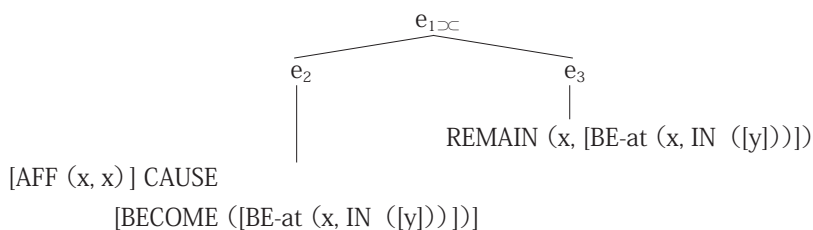
(15) 日本語の設置動詞の語彙事象構造



e_2 は、 x が y に働きかけ、 y がある位置Locに存在するようにすることを表し、 e_3 は、 e_2 の事象が完成した時を始点として、 y がLocに留まっていることを x の意志によってコントロールしていることを表す。設置動詞のテイル形は二義的となるが、動作継続の意味を表す場合、維持部分である e_3 が削除され、維持解釈となる場合は、使役変化部分である e_2 が削除されると考えなければならない。

テイル形が動作継続と意志性のない持続解釈となる着衣動詞の場合、 e_3 には意志的コントロールを表すAFFが含まれないということになるので、その語彙的事象構造は以下ようになる (笠原2011, 林2012)。

(16) 日本語の着衣動詞の語彙事象構造



これにテイルが接辞化されると、 e_2 あるいは e_3 が削除され、持続あるいは動作継続の解釈となる。着衣動詞は、動作主と対象が同定される再帰的概念構造を持つため、 e_2 が削除されても、 e_3 が削除されても、 x が統語的主語と連結されるため、動作継続解釈、持続解釈のいずれにおいても、同一の統語的主語を持つこととなる。このように、事象構造を拡張した分析は、テイル形の二義的解釈の説明に方向性を与えるだけでなく、設置動詞と着衣動詞の語彙化の違いにも示唆を与えることになるのである。

ここで次のような2つの疑問が生じるであろう。第一に、テイルが(15)、(16)に適用した場合、それぞれの下位事象の一方を削除することになる理論的メカニズムは一体何か。第二に、Nedjalkov and Jaxontov (1988) が受動的と呼ぶ他動詞から自動詞への項構造の変更も、この事象構造を用いた分析によって同様に扱うことができるのか。

3.2 下位事象の削除

先ず第一の問題から考察しよう。岩本（2008）は、下位事象構造を含む様々な複合的事象構造にテイルが適用した場合の解釈の違いに注目し、アスペクト関数は下位事象に分配的に、かつ、相同的に適用しなければならないと結論付けた³。例えば、「殺す」という事象の場合、「絞め殺している」「呪い殺している」などは対象が単数であっても、動作継続の解釈が可能であるが、「撃ち殺している」「投げ殺している」は、対象が単数の場合、動作継続の解釈は不可能で、パーフェクト解釈となる。前者は動作主の動作が対象の変化の完了時まで続けられる同延使役（extended causation）となるが、後者は動作主の動作が対象の変化のきっかけを与えるだけのオンセット使役となる（Shibatani 1976, 丸田1998）。同延使役は、使役事象と変化事象が相同的な重複関係となるが、オンセット使役の場合、両者は先行関係となる。下位事象が相同的な前者では、テイルのアスペクト関数が両者に分配され、動作継続の解釈が可能となるが、下位事象が先行関係となる後者では、テイルのアスペクト関数を両者に相同的に分配することができない。そのため、動作継続の解釈が阻害され、パーフェクト解釈となるのである。このことから、岩本（2008）は、アスペクト関数適用に関して、次のような原則が存在すると主張している。

(17) 相変換関数分配の原則

二つの下位事象 e_2, e_3 によって構成される e_1 に適用する相変換関数は、 e_2, e_3 に分配され、両者に相同的に適用しなければならない。

（岩本 2008:206）

この原則によると、テイルが使役変化事象と持続事象部分が隣接関係となっている着衣動詞や設置動詞に接辞化した場合、その関数を両者に相同的に分配することができないため、パーフェクト解釈だけが可能となる筈であるが、実際には、持続部分を削除した動作継続解釈も、使役変化部分を削除した持続（維持）解釈も可能となる。つまり、「相変換数分配の原則」は、先行関係の場合は、アスペクト関数の下位事象へ分配を不可能としなければならないのであるが、隣接関係の場合は、一方の下位事象を削除してもう一方に適用することを可能に

しなければならないことを示唆している。

これには、先行関係や重複関係に含まれる下位事象が1つの事象を構成する、互いに不可分の関係になっているのに対し、隣接関係にある2つの事象間にはそのような密接な関係がないことに原因がある。すなわち、先行関係や重複関係にある2つの下位事象 e_2 、 e_3 の間では、一方を削除すると因果関係や並立関係そのものが成立しなくなる依存関係が存在するが、隣接関係にある2つの下位事象は、それぞれ互いに独立しており、一方が削除されても他方の存在そのものには何らの影響はない。そのため、隣接関係ではアスペクト関数を分配せずに、一方の下位事象にそれを適用し、他方を削除することが可能になるのである。それゆえ、(17)は以下のように修正する必要があるだろう。

(18) 相変換関数分配の原則（修正版）

二つの下位事象 e_2 、 e_3 によって構成される e_1 に適用する相変換関数は、 e_2 、 e_3 に分配され、両者に相同的に適用しなければならない。ただし、 e_2 あるいは e_3 の成立がもう一方に依存していない場合、それらの一方を削除し、他方に相変換関数を適用することができる。

この原則と修正は、精緻に行われたものではないので、いずれ理論的に綿密な定式化が必要であるが、現在の目的のためには最低限必要な条件を示している。

このように、日本語の持続あるいは維持解釈は、使役変件事象の削除によって与えられるが、他動詞の主語そのものが削除される「受動タイプ」の結果構文はどのように派生されるのであろうか。

4. アスペクト類型論への示唆

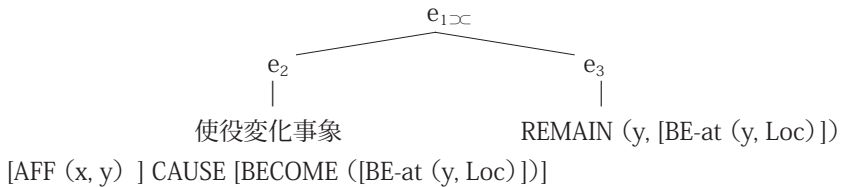
ここでは、主に事象投射理論（岩本2008）を用いた林（2012）による中国語の分析に基づき、この理論の類型論への応用の可能性について探る。

中国語にはアスペクト形式素「着」(zhe)が動詞に接辞化し、項構造が変更する結果構文には、次の3つのパターンがある。

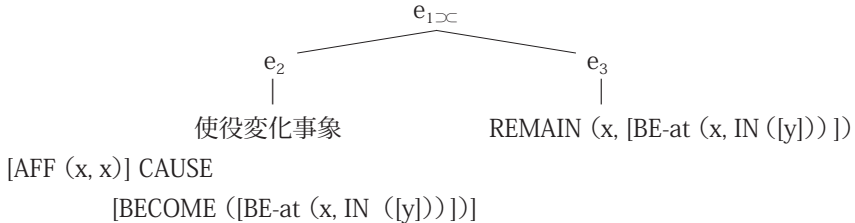
- (19) 小王 穿著 新衣 (進行／結果)
王さんが新しい服を着ている
- (20) 床上 放著 書 (結果)
ベッドの上に本が置いてある／ベッドの上に本が置かれている
- (21) 門 開 著 (結果)
ドアが開いている (林2012)

着衣動詞 (19) の場合は、日本語と同じように、動作継続あるいは結果持続の意味となるが、後者の場合、王さんが自分で新しい服を着たという含意は失われる。一方、設置動詞 (20) ~ (21) の場合、日本語と違い動作主は完全に削除され、自動詞構文となる。アスペクト的結果構文に見られる日本語と中国語の違いを、林 (2012) は両言語の持続部分の語彙化パターンの違いとして次のようにまとめている。日本語では、着衣動詞の場合、持続部分に意志によるコントロールはないが、設置動詞の持続部分には意志によるコントロールがある。一方、中国語では、着衣動詞にも設置動詞にも持続部分に意志によるコントロールはない。日本語のこれらの動詞の語彙事象構造の概略は (15)、(16) に示したとおりであるが、中国語では以下になる。

(22) 中国語の設置動詞の語彙事象構造



(23) 中国語の着衣動詞の語彙事象構造



着衣動詞の場合、動作主と対象が同定されているため、動作継続解釈においても持続解釈においても文法関係の変更は見られない。日本語の着衣動詞と同様である。一方、設置動詞の場合、持続部分に動作主の意志によるコントロールがなければ、そこには動作主と同定される項は存在しない。すると、アスペクト的結果構文において使役変件事象が削除されると、そこに他動詞から自動詞への項構造の変更が行われることになるのである。

このように、アスペクト的結果構文に見られる項構造の変更は、「相変換関数分配の原則」と持続部分における動作主によるコントロールの有無によって説明されることになる。

5. 今後の課題

以上の分析が、どの程度アスペクト的結果構文の類型に当てはまるかは、今後分析の範囲を広げていくことによって検証しなければならない。今回、日本語と中国語で使役事象の削除を引き起こすアスペクト関数の特徴を詳しく論ずることはできなかったが、両者には大きな違いがある (林2012)。語彙化の違いのみならず、アスペクト関数の特徴の違いが両言語におけるアスペクト的結果構文の差異として表れている可能性があるため、その点を詳細に検討する必要がある。他の言語にこの分析を応用する場合にも同様の考慮が求められる。

一方、アスペクト的結果構文において他動詞から自動詞へ項構造が変更されるメカニズムが、使役変件事象の削除によるという本分析は示唆的である。生成文法では一般的に受動化などのヴォイス変換は動作主役割の隠蔽によって引き起こされると考えられているが、アスペクトが動作主の隠蔽を引き起こすメ

カニズムが明にされたことにより、形態・統語的アプローチによる定式化と概念意味論的アプローチによる定式化の接点を探る研究が、今後求められるであろう。

注

- 1 中国語の「着」については、以下を参照のこと。荒川（1982, 1985）、井上（2001）、木村英樹（1981）、林（2012）、劉寧生（1985）、劉綺紋（2006）、鄭汀（2010）など。
- 2 これは、日本語学ではテイル文の「持続」あるいは「維持」と呼ばれていた用法である。藤井（1966）、森山（1988）、吉川（1971）、岩本（2008）などを参照のこと。
- 3 Jackendoff（1991）は、物体、空間、事象のアスペクト特性は [±bounded]、[±internal structure]、始端に境界があることを示す [bounded by -]、終端に境界があることを示す [bounded by +] という共通の概念素性によって定義でき、[±bounded]、[±internal structure] の値を変更する関数によって複数化や単数化、限界化や非限界化が行なわれると考えている。岩本（2008）はこれに投射関数と断面化関数を加え、アスペクト関数の適用によって全てのアスペクトの意味とその変更を定義する体系を提示している。

参考文献

- 荒川清秀（1982）「中国語の語彙」『講座日本語学 12 外国語との対照III』明治書院, 62-84.
- 荒川清秀（1985）「“着”と動詞の類」『中国語学』306, 30-33. 荒川清秀（1986）「中国語動詞の意味における段階性」『中国語』1986年9月, 321号, 大修館書店, 30-33.
- 藤井正（1966）「動詞+ている」の意味」『国語研究室』東京大学 金田一春彦（編）（1976）『日本語動詞のアスペクト』97-116, むぎ書房に所収.
- 井上優（2001）「中国語・韓国語との比較から見た日本語のテンス・アスペクト」『言語』12月号, 第30巻, 第31号, 大修館書店, 26-31. 井上優・生越直樹・木村英樹（2002）「テンス・アスペクトの比較対照-日本語・朝鮮語・中国語-」生越直樹編『シリーズ言語科学4:対照言語学』東京大学出版会.
- 岩本遠億（2008）『事象アスペクト論』開拓社.

- Jackendoff, Ray (1991) Parts and boundaries. In *Lexical and conceptual semantics*, In Beth Levin and Steven Pinker (eds.), 9-45. Cambridge, Mass.: Blackwell.
- Jackendoff, Ray (1996) The proper treatment of measuring out, telicity, and perhaps even quantification in English. *Natural Language and Linguistic Theory* 14: 305-354.
- 笠原政 (2011) 「日本語と韓国語における非完結相—事象投射理論からのアプローチ—」修士論文, 神田外語大学言語科学研究科.
- 木村英樹 (1981) 『『付着』の“着/zhe/”と『消失』の“了/le/”』『中国語』258, 24-27.
- 木村英樹 (1982) 「中国語」『講座日本語学 11 外国語との対照II』明治書院, 19-39.
- 林君億 (2012) 「テイルと着一日中アスペクト対照」修士論文, 神田外語大学.
- 劉寧生 (1985) 「着」とそれに関連する2つの動態範疇』『言語研究』第2期, 47-76. [于康 (編) (2001) 所収.]
- 劉綺紋 (2006) 『中国語のアスペクトとモダリティ』大阪大学出版会.
- 丸田忠雄 (1998) 『使役動詞のアナトミー—語彙的使役動詞の語彙概念構造』松柏社, 東京.
- 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』明治書院、東京.
- Nedjalkov, V.P. (ed) (1988) *Typology of Resultative Constructions*. Amsterdam: John Benjamins.
- Nedjalkov and Jaxontov (1988) The Typology of Resultative Constructions. In Nedjalkov, V.P. (ed) (1988), pp.3-62.
- Ogihara, Toshiyuki (1998) The ambiguity of the *-te iru* form in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 7, 87-120.
- Perel' Muter, Ilja A. (1988) The stative, resultative, passive and perfect in Ancient Greek (Homeric Greek). In Nedjalkov, V.P. (ed) (1988), pp.277-287.
- Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*. MIT Press.
- Pustejovsky, James (2000) Events and the semantics of opposition. In Carol Tenny and James Pustejovsky (eds.) *Events as grammatical objects*, 445-482. Stanford: CSLI Publications.
- Shibatani, Masayoshi (1976) *Syntax and Semantics 6: the grammar of causative constructions*. New York: Academic Press.
- 鄭汀 (2010) 「存在表現における中国語の「着」構文と日本語の「てある」構文の対応について」『神田外語大学言語科学研究センター紀要』第9号, 言語科学研究センター (CLS)

アスペクト的結果構文の類型についての試論

, 133-148.

吉川武時（1971）「現代日本語のアスペクトの研究」Monash大学日本語科修士論文，金田一
春彦（編）（1976）『日本語動詞のアスペクト』155-323，むぎ書房に所収。